

一宮町長
馬淵 昌也

令和7年3月に、一宮町の「生物文化多様性計画」が完成しました。千葉県下で、生物多様性について計画や戦略を有する自治体はまだ少なく、一宮町は町村で初めての策定です。また、生物に加えて文化という項目を加えたのは全国でも初めてだそうです。策定にお力をお借りした吉田正人筑波大学名誉教授をはじめ、ご協力いただいた皆さまに感謝を申し上げます。

その計画の策定過程で、一宮町でしか確認されていない植物があるということをお教えいただきました。それは、カヤツリグサの仲間で、「イソハマアオスゲ」といいます。残念ながら、地味で目立たない草だそうです。一宮町以外では生息が確認されていないそうです。

一宮町は約23平方キロの小さな町です。ですから、町の固有種などないだろう、と思っていました。ところが、この「イソハマアオスゲ」はそう言えるかもしれません。大変に驚きました。この草は、イソアオスゲという草と、ハマアオスゲという草の雑種で、やや高くなった砂地に生えるそうです。土中のマツの根などをたよりにして生えるのだそうです。ただ、目立たない草

なので、これまで、専門家の方々を除いては、その存在や価値について、誰もわかっていませんでした。そこで、釣ヶ崎や一宮海岸にあった生息地は、各種工事によってかなり失われてしまったそうです。

しかし、これからはそれではいけません。もう貴重な種類とわかったたので、みんなですべてゆきたいと思います。専門家の先生方は、地味な草で、採ってゆく人はいないだろうから、看板を立てて、皆さまに保護へのご協力を仰いでゆくのがよいだろう、と言っておられます。そこで、町で看板を用意して、注意を促してゆこうと考えています。

かつて、一宮川のほとりにお住まいで、川や海の生物を調査研究しておられた元東邦大学教授の秋山章男先生からは、一宮川河口の干潟で新種のスナホリムシを発見したが、それはここで見つかったのではない、と伺いました。スナホリムシというのはダンゴムシの仲間で干潟や砂浜の水中にいる小さい生物です。小さい一宮町でも、こういう特有の生き物がいる、ということこそ、生物多様性のあかしです。みんなですべてゆきましよう。